

明烏(下) (明烏花濡衣)

へ折ふし降りくる雪吹雪 うちには亭主が浦里を 庭の古木に括りつけ箒  
おつとり 声荒らげ

「ヤイ／＼浦里 その苦しみやア心がらだ 総別遊女を折檻して  
客を堰く事客の為 二つにやあ女郎大切 身代はこりやマ猶大事  
あの客もまだ若い人の様だが あんまり繁々通われちゃア  
親がかりなら勘当 又主持ならばしくじる道理 こんじゅう  
年期の切り替えしも みんなあの客の為 この上は心中するか  
駆け落ちか サとどの括りや 知れてある詮索幾ら言つても  
聞き入れのねえ あの時次郎の事ハ モすっぱりと思いつても  
しまえ アアこれ男ども 浦里を気をつけい

へト言い捨ててこそ奥に入る 浦里あとを打ち眺め 別れとなれば今更に  
涙に暮れて居たりしが

「あの時さんは どこにどうして居さんす事じゃやら マ一度／＼顔が  
見たい 逢いたいわいなア

へ昨日の花は今日の夢 今は我が身につまされて 義理という字は是非も  
なや

「あの二階で弾く三味線を 聞くにつけても思い出す いつぞや主が  
居続けに 寝間着のままに引き寄せて 弾く三味線の面白さ

それに引き替えこの苦しみ アア味気ない浮世じゃなア

へ好いた男にわしゃ命でも 何の惜しかろぞ露の身の 消えば恨みもなき  
ものを

「わしがこの身は モどうなるとも

へたとえこの身は淡雪と 共に消ゆるも厭わぬが この世の名残に今一度  
逢いたい見たいとしゃくり上げ 狂気のごとく心も乱れ 涙の雨に雪解け  
て前後正体なかりけり へ男はかねて用意の一と腰 口に咬えて身を固め  
忍びしので屋根伝い 見るに浦里嬉しやと 悲しさこわさあぶなさに 可  
愛と一と声明がらす 後の浮名や残るらん